二〇一三年度

G国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
　　HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
　　（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
四　なお、問題番号は一～三となっています。
　　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1 ○ 2 ● 3 ○ 4 ○ 5

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

いったいヨーロッパを理解するとはどういうことだろう？

谷崎が理解していたヨーロッパは、このエッセー[注1]に関する限り、明るいもの、便利なもの、能率的なもの、自由なもの、快適なもの、一口で言えば、近代的なものというほどの意味である。この種のもののみをヨーロッパのすべてであると見て、一方にそれを理想視する近代主義があれば、他方に、谷崎のようにそれに反発する懐古趣味がある。前者は、「近代」が提出した価値観だけをヨーロッパのもっとも重要なめじるしとして抜き出して、これに近づくことを目標とし、日本の前近代性や封建性を批判する尺度とする。他方は、この日本の前近代性や封建性のもっている特有の価値をまもるために、西洋的なものを可能な限り遠ざけようとするが、そういう意味で防衛的なこの姿勢のうちにも、「近代」を西洋の全体だと思いこんでいるふしがあるところは前者とあまり変らない。谷崎のみならず、柳田国男[注2]にせよ、保田与重郎[注3]にせよ、西洋近代 [a] だけを拾い上げて純粋化している姿勢に、(1)それが昭和に入ってからの出来事であるだけに、私には滔々（とうとう）たる「西洋化」の波の中で意識的に抵抗の姿勢を強めている一種の抽象性・観念性がかんじられるのである。

だが、西洋近代を理想とするにせよ、それに抵抗するにせよ、どちらの場合にも近代以前のヨーロッパに積極的に触れていこうとする姿勢がなかったことでは共通している。勿論、西洋の古代や中世を専門に研究する学問が日本においてかなり高度に発達していることは私も知っている。だが、それは日本人全体の価値観を逆転させるような大きな影響力をもった思想を形成しているわけではない。日本のなかに圧倒的な優位をもって流れこんで来て、日本人の生活様式を変える力をもち得たのは、西洋の古代でも、中世でもなく、要するに(2)実用主義的な意味における「近代」である。そして生活に根ざしていないような思想は、日本人の意識を変革し得る力を持ち得ない以上、これまでの日本人の思想史が西洋の「近代」を取り入れようとしたり、あるいはこれを遠ざけようとしたりする反応を繰り返してきたことは、ある意味で当然のことと言えるかもしれない。前者の場合は経済や

産業や政治制度や軍事力の要請のもとに有無を言わせぬ必要性をもっていたし、後者の場合は美意識という主観的な砦の中に閉じこもって押し寄せる「近代」に抵抗するという消極的・守勢的なものでしかあり得なかった。

しかしヨーロッパには技術文明だけしかないのではなく、それを生み、その発展を必然ならしめた文化伝統があるはずである。中世あるいはそれ以前から受けついでいる宗教的伝統があり、その伝統によって有機的な調和と統一とをたもちつづけてきた生活の様式があり、行動の形式がある。というようなことは、多くのひとびとがすでに気づいていることであり、意識的に追究しつづけている問題ではあるが、依然としてそれが問題の深部に触れ得ないでいるのは、そういう文化伝統が近代の機械文明を生んだ母胎であり、また同時に、そういうものがいまや近代の機械文明の危機を警告している主体でもあるという西洋近代の二重構造にどれだけ気づいているかにかかっているように思える。つまり、(3)古代・中世はいまでもなおヨーロッパでは生きつづけているとも言えるのである。

「近代」はヨーロッパが自分の内部から生み出したものであるだけに、その毒を中和する対症療法もまた日本よりはなおはるかに豊富に備えている。じっさい東京の夜の街よりヨーロッパの夜の街には電光が乏しく、暗く、静かで、ひっそりしているのは私には今でも象徴的なことのように思えている。生活を娯しむためのあの食卓上の蠟燭の灯りがゴシックの聖堂内陣を照らす蠟燭の仄明りとまったく無関係なものだとは私には思えない。これはほんの一例である。古代や中世以来の西洋の文化伝統に本質的にかかわりを持ち得ていない日本人の生活に、いったい機械文明に対する抵抗力があり得るのかどうかは、谷崎の(4)ツウフンやるかたない嘆声が示している通り、はなはだ懐疑的と言わざるをえない。

日本人特有の自然主義的な生き方や唯美主義やけがれを嫌う潔癖感は、(4)もともと閉鎖的な、自己完結的な価値観でしかない以上、明治以来怒濤のように流れこんできた異質の文明にふところを開いてからというもの、しだいにそれに押し切られ、片隅に押しやられ、そこに日本人一流の無常感がはたらけば、亡びゆくものを死守しようとする頑なさもなく、われわれは今や近代的なものも日本的なものも入り混ったきわめてだらしない形式の混

在に耐えて、生活様式の調和と安定と統一とを奪われたままに、その日その日をやり過しているのである。

[b] の生きていないようなところに芸術の形象化もなし得ないとすれば、日本人の近代生活は、もっとも芸術形成にふさわしくない土壌といえるかもしれない。事実、鷗外にせよ、荷風にせよ、谷崎にせよ、一流の芸術家でこの様式美の分裂を意識しなかった人はいなかった。が、分裂を回避するために、結局かれらは、意識的に実生活を「日本化」したり、「西洋化」したりすることで、一種の生体実験をこころみ、生の統一をそれぞれ個別的な独創で防衛しようとしてきた。その系譜はおそらく三島由紀夫にまでつづいていると言えるだろう。

学問や思想の分野では、混乱はよりいっそう無自覚に容認されてきたといえるかもしれない。

今日われわれが用いているさまざまな用語、学説、観念のどれひとつを取っても、西欧の文化伝統と関わりなしに純粋に日本的なものとして独立しているものなどはなにひとつないといっても過言ではないだろう。が、それでいてそのどれひとつも、西欧の学界や思想界にみられるような相互にしっくり釣合った調和をみせているものもないといってよい。自由、進歩、個性、伝統、人権、国家、唯物論、観念論、封建主義、民主主義、全体主義、福祉国家、ヒューマニズム、エゴイズム、インテリゲンチア――今日われわれが勝手な感情をこめて用いているこれらの用語は、いずれもヨーロッパの思想体系の内部では、それぞれ固有の歴史的背景をもち、西洋のそのときどきの現実を解釈し、説明するための必要に発して使われてきた。それは単に解釈し、説明するための手段であるばかりでなく、現実の困難を処理し、解決するための道具でもあった。

思想は単なるフィクションであって、現実の困難を克服することにこそ真の目的があったからである。その限りでは、西洋的な息のかかった用語や学説や観念は、ヨーロッパの現実から切り離して用いることは出来なかった筈である。(5)だからひとたび日本に流れこんでくるや、それぞれは互いに関係のない、バラバラの抽象体として作用し、無意味な衝突をくりかえすことになる。それというのも、思想は、それを(ロ)アヤツるものの主観的な欲望を満たすための道具と化し、論争といえば、思想と思想との対立ではなく、思想の化粧をほどこした二つの現実の頑なな対立に終るしかなかったからである。かくして現実の困難は、なにひとつ解決されず、客観的正義の名

の下に、主観的欲望が主張されるというような醜悪なことが行われ勝ちであった。

思想がかように集団的欲望の道具と化するのは、逆説的に聞えるかもしれないが、思想は道具でしかないという自覚が欠けているからではないか。たいがいの論争や批評が思想の名に価しないのは、フィクションとして思想を語ることによってしか、思想は現実を動かし得ないという逆説に突き当っていないからではないか。思想や観念にはもともとなんの実体もないのである。それは現実の前でたえず試され、裏切られ、復讐を受けているなにものかでなければならぬ。

ヨーロッパの思想家はつねに思想と現実とのこの二重性に耐えることを強いられているとも言えるだろう。それは現実を超えながらしかも現実の唯中にあるという意味で、遊戯と戦闘の精神である。だが、日本では、この両者の私小説的なユチャクがやすやすとおこなわれ、かくて、現実と戦わずに思想と戯れる文化主義と、思想を実生活から、いいかえれば理想を現実から突き離す余裕をもたない実感信仰とが、奇妙にべとべとした両手を握り合って、有効な思想の結実をさまたげる土壌を形づくっている。

どんな思想も現実を改変しようとする理想に燃えていなければならない。だがまた、現実の前で思想は一片の紙屑でしかないことをも知っていなければならない。

なにひとつ完全な価値のないこの相対的な現実世界において、かように矛盾をはらむパラドキシカルな生き方に耐えることほど困難なことはないだろう。なぜなら、現実は相対的なものであって、そこに絶対を求めることは出来ない。だが、それにも拘らず、絶対を求めずして相対的なものを動かしても、それは相対的な変革にとどまるのみである。この二重性を克服するためには、われわれは「自己」を超えたなにものかを持たなければならないのである。文化主義や実感信仰が依然として日本の思想界の大勢をなしているのは、絶対者[注4]のいない日本では、相対的なものがやすやすと絶対化されるからではないか。

一方に、現実から遊離した単純きわまる理想主義者がいるかと思えば、他方に、現実改変へのいかなる意志も持たない安易に妥協的な現状肯定論者がいる。実用性に耐え得ない空理空論と、実用性にしか価値をみない現実

主義と、この二つは同じ相対主義の二面であって、久しくわが国論を二分してきた革新と保守の両極への硬直(注5)また、現実と戦う厳しさと同時に現実になにかを賭ける遊戯精神(6)をもそなえた思想のほんとうの自由というものに、日本の湿潤な精神風土が不慣れであることと無関係ではないであろう。

（西尾幹二『ヨーロッパ像の転換』による）

（注）

1 このエッセー――谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）の書いた「陰翳礼讃」（一九三三～四）のこと。陰翳を日本的美意識の核として重視した。

2 柳田国男――日本の代表的な民俗学者（一八七五～一九六二）。習俗や伝承を掘り起こしたことで知られる。

3 保田与重郎――反近代の主張で知られる文芸評論家（一九一〇～一九八一）。

4 絶対者――「絶対者」は、本文に続く部分では、宗教に代表される「絶対という観念」といいかえられ、「自己の頭上に絶対者を据えて、その上で相対世界を実利的に生きるというヨーロッパ人の二元論的生き方は、理想と現実との使い分けを可能にしてきた」と概括されている。

5 革新と保守――一九五五年から九〇年代初めまで続いた二大勢力の対立を指す。この文章が発表されたのは、その間の一九六九年である。

問

(A) ――線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) 空欄 [a] にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 が関心を示さなかったもの
2 の網の目からもれたもの
3 と拮抗する存在感のあるもの
4 とつながりそうでいてそうでないもの
5 が暗に軽侮したようなもの

(C) ――線部(1)について。ここで特に「昭和に入ってから～だけに」と強調している理由の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 西洋の「近代」が入ってきたのは明治期のはずなのに、ということをめぐってのいぶかしさがある。
ロ のちに述べる「抽象性・観念性」を導き出すために、ここでこう言っている。
ハ 「滔々たる『西洋化』」の結果としての「昭和」、という把握が背後にある。
ニ 「抵抗の姿勢を強めている」代表として谷崎らをあげ、それに共感している。
ホ 「純粋化」と「抽象性・観念性」との違いを強調しようとしている。

(D) ――線部(2)の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 日本人の日常生活に役立つようなものとしての「近代」。
ロ 日本人の生活を変えるというよりも、西洋人の実用性に根ざした「近代」。
ハ 日本人の生活様式や意識を変革しうるような「近代」。
ニ 「経済」も広義には含みこむような実用的な「近代」。
ホ 「軍事力の要請」とは一線を画して受け止めるべき「近代」。

(E) ――線部(3)の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ヨーロッパでは現在でもかつての文化伝統を至る所に見ることができる。

2 「西洋近代の二重構造」というかたちで、ヨーロッパの古代・中世は生き続けている。

3 近代文明の危機を警告するというかたちで、文化伝統が現在も生き続けている。

4 「生きつづけている」ことと、「西洋近代の二重構造」とは切り離して考えるべきことである。

5 機械文明への「警告」だけでなく、その「母胎」という意味も込められている。

(F) ――線部(4)について。ここで「～でしかない以上」という言い方をした理由の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「閉鎖的な、自己完結的な価値観」を低く見るという偏った考えが根底にある。

ロ 「閉鎖的な、自己完結的な価値観」には異質な文明に対抗する力がないと確信している。

ハ 「自然主義的な生き方」がこの部分につながることは証明されていない。

ニ ここでこういう言い方をしたことが、「混在」、「奪われたまま」という見方につながった。

ホ 「以上」に「しか」を付け加えることで、「無常感」と「亡び」への無抵抗とに順接する。

(G) 空欄 b にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 様式美　2 形式美　3 調和性　4 潔癖感　5 無常感

(H) ――線部(5)について。ここではヨーロッパの「思想」が日本に流入した場合のことが述べられているが、ヨーロッパと日本の「思想」についての説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 日本における思想は、たいていのものは日本固有の歴史的背景をもっている。

ロ 思想を道具視するかフィクション視するかが、欧日の大きな相違点である。

ハ　文化主義と実感信仰とは、ヨーロッパにおいては截然（せつぜん）と区別されている。
ニ　絶対と相対の二重性は、欧日ともに克服すべき大きな課題である。
ホ　思想の相対性とは、「現実の前で思想は一片の紙屑」という捉え方に通じる。

(1)　――――線部(6)について。「遊戯精神」の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　「現実になにかを賭ける」遊戯精神とは、現実からの遊離に通じる。
ロ　「現実と戦わずに思想と戯れる」態度は、遊戯精神と呼ばれる資格がない。
ハ　「思想は現実を動かし得ない」と知りつつチャレンジするのが真の遊戯精神である。
ニ　思想は「一片の紙屑」でしかないのを自覚するのが、遊戯精神のあるべき姿である。
ホ　遊戯精神と戦闘精神とは相容れないものではなく、むしろ相補的な関係にある。

二　左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

(1)幸思順、金陵[注1]ノ老儒也。皇祐[注2]中、沽ニ酒ヲ江州[注3]ニ、人無ニ賢愚、皆喜レ之。時ニ劫[注4]レ江賊方熾。(a)有ニ一官人ノ艤[注5]ニ舟ヲ酒壚[注6]下ニ、偶ク与ニ思順ニ往来相善。思順以テ酒十壺ヲ餉レ之ニ。已而被レ劫セ於蘄[注7]・黄ノ間ニ。群盗飲ミ此ノ酒ヲ、驚イテ曰ク、「此幸秀才[注8]ノ酒邪ト。」官人識リ其ノ意ヲ、即チ(2)紿[あざむ]キテ曰ク、「僕ハ与ニ幸秀才ニ親旧タリト。」賊相顧ミテ歎ジテ曰ク、(3)「吾ガ儔[ともがら]何為劫幸老所親哉。」斂[をさ]メテ所ヲ劫スル還シレ之ニ、且ツ戒メテ曰ク、「見ルモ幸ヲ慎ンデ勿カレト言フコト。」思順年七十二、日ニ行クコト[注9]二百里、盛夏ニ曝[さらす]モ日中ニ不レ渇セ、蓋シ嘗[つね]ニ啖[くらひ]レ物ヲ而不レ飲マ水ヲ云フ。

（蘇軾『東坡志林』による）

（注）1 金陵――現在の江蘇省南京市。　2 皇祐――北宋の年号（一〇四九～五四）。
3 江州――現在の江西省九江市。長江沿岸に位置する。　4 劫江賊――長江を往来する船に対して強盗を働く盗賊。
5 艤舟――舟を岸につないで出発準備をする。　6 酒壚――酒店。
7 蘄・黄間――蘄州・黄州の間。現在の湖北省の長江沿岸。　8 秀才――科挙を受験した者の呼称。
9 二百里――約百十二キロメートル。

問

(A) ――線部(a)の訓みとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 まさに　2 つねに　3 ならびに
4 いよいよ　5 ほぼ

(B) ――線部(b)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 絶望的なことに　2 そればかりか　3 その後まもなく
4 それ以前に　5 今となってはもう

(C) ――線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 賢い人も愚かな人も、誰もが酒を売る幸思順のことを敬愛した。
2 人には賢いとか愚かとかいった区別はないとして、幸思順は誰にでも喜んで酒を売った。
3 賢い人であれ愚かな人であれ、幸思順は酒を買いに来る誰のこともひとしく歓迎した。
4 人には賢いとか愚かとかいった区別はないので、誰でも幸思順の売る酒の良さがわかった。
5 賢い人も愚かな人も、誰もがひとしく幸思順の売る酒を好んだ。

(D) ――線部(2)について。官人はどういう嘘をついたのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 盗賊が自分たちの飲んだ酒を幸思順の酒だと思い込んだので、それを肯定した。
2 幸思順とはたまたま知り合っただけなのに古くからの友人だと誇張した。
3 盗賊たちがいう幸秀才とは別人なのに、幸思順がその人であるかのように装った。
4 自分が仲立ちをすれば幸思順の酒がもっと手に入るかのように誤解させた。
5 幸思順とは血縁関係がないにもかかわらず自分の親であると偽った。

(E) ――線部(3)の訓読として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 なんぞかうらうのしたしむところにけふせられんやと
2 なんすれぞけふしてかうらうにしたしまれんやと
3 なんすれぞかうらうのしたしむところをけふせんやと
4 なんぞかうらうをけふするもののしたしむところとならんやと
5 なんすれぞかうらうのところをけふしてしたしまんかなと

(F) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 幸思順は知識人として年齢を重ねながらも書物には詳しくなかった。
ロ 幸思順の酒造りとしての名声は高く、中国全土に知らないものがいなかった。
ハ 幸思順から恩義を受けた官人は、長江流域を巡回してはその酒を宣伝していた。
ニ 幸思順の酒には、飲めばすぐそれとわかるほど際立った品質が備わっていた。
ホ 幸思順は若い頃乱暴者として名が知られたために、盗賊にまで敬遠されていた。
ヘ 幸思順は、水をあまり必要としないという特徴をもつ頑健な身体を持っていた。

三　左の文章は、女房の右近が光源氏と紫の上の御前で、夕顔の遺児である玉鬘（たまかずら）を見つけたことを報告する場面の一節である。これを読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

大殿油などまゐりて、うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。女君は二十七、八にはなりたまひぬらむかし、盛りに清らにねびまさりたまへり。少しほど経て見たてまつるは、またこのほどにこそ匂ひ加はりたまひにけれと、見えたまふ。かの人を、いとめでたし劣らじと見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほこよなきに、幸ひのなきとあるとは、隔てあるべきわざかなと、見合はせらる。大殿籠るとて、右近を御足まゐりに召す。「若き人は、苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心かはして、睦びよかりけれ」とのたまへば、人々忍びて笑ふ。「さりや。誰かその使ひならひたまはむをばむつからむ。うるさきたはぶれごと言ひかかりたまふを、わづらはしきに」など言ひあへり。「うへも、年経ぬると、うちとけ過ぎば、はたむつかりたまはむとや。さるまじき御心と見ねば、あやふし」など、右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。今はおほやけに仕へ、いそがしき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御たはぶれごとをのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人（ふるびと）をさへぞたはぶれたまふ。「かの尋ね出でたりけむや、何ざまの人ぞ。尊き修行者を語らひて、率て来たるか」と問ひたまへば、「あな見苦しや。はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ、見たまへ付けたりし」と聞こゆ。「げに、あはれなりけることかな。年ごろはいづくにか」とのたまへば、ありのままには聞こえにくくて、「あやしき山里になむ。昔人もかたへは変らではべりければ、その世の物語し出ではべりて、堪へがたく思ひたまへりし」など聞こえゐたり。「よし、心知りたまはぬ御あたりに」と隠しきこえたまへば、うへ、「あなわづらはし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖して耳ふたぎたまひつ。「かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、「必ずさしもいかでかものしたまはむと思ひたまへしを、こよなうこそ生ひまさりて、見えたまひしか」と聞こゆれば、「をかしのことや。誰ばかりとおぼゆ。この君」とのたまへば、「いかでか、さま

では」と聞こゆれば、「したり顔にこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろやすしかし」と、親めきてのたまふ。

（『源氏物語』による）

（注）　かの人――玉鬘をさす。

問

(A)　――線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　時間　　2　距離　　3　方向

4　程度　　5　身分

(B)　――線部(2)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　考えが浅かったのだろうか

2　心配しすぎたのだろうか

3　世評に影響されたのだろうか

4　思い込みであったのだろうか

5　軽い気持ちであったのだろうか

(C)　――線部(3)の現代語訳を七字以内で記せ。

(D)　――線部(4)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　すねる　　2　ことわる　　3　いやがる

4　気味悪がる　　5　腹を立てる

(E) ――線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 源氏が右近に親しくし過ぎると
2 紫の上が右近に親しくし過ぎると
3 源氏が紫の上に親しくし過ぎると
4 右近が源氏に親しくし過ぎるので
5 右近が紫の上に親しくし過ぎるので
6 源氏が右近に親しくし過ぎるので

(F) ――線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 元気でお仕えしていますので
2 交代もせずに仕えていますので
3 昔と同じ所で暮らしていますので
4 かたわらでずっと控えていますので
5 それなりの暮らしをしていますので

(G) ――線部(7)について。なぜ耳をふさいだのか、その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 夜も更けてもう寝たいと思ったから
2 世俗のつまらない話をしているから
3 多くの女性のことを話しているから
4 自分に聞かせたくない話をしているから
5 源氏と右近が楽しそうに話しているから

(H) ――――線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 まさかこの世には生きていらっしゃらないでしょう
2 決してそれほどは美しくいらっしゃらないでしょう
3 間違いなくあの女性とそっくりでいらっしゃるでしょう
4 きっと何とかそれなりにお暮らしでいらっしゃるでしょう
5 確かにあの女性と同じくらいきれいでいらっしゃるでしょう

(I) ――――線部(9)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 夕顔様ほどにはとうてい美しくありません
2 紫の上様の美しさにはまったく及びません
3 美しいけれども、紫の上様ほどではありません
4 女房たちとは比べものにならない美しさです
5 夕顔様とうり二つと言ってよいほどの美しさです

(J) ═══線部(イ)～(ニ)はそれぞれ誰をさすか。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

1 光源氏　2 紫の上　3 玉鬘　4 夕顔
5 右近　6 源氏の女房　7 夕顔の女房

(K) ～～～線部(a)・(b)はそれぞれ誰に対する敬意か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

1 光源氏　2 紫の上　3 玉鬘　4 夕顔

(L) ▬▬▬線部(あ)～(え)のうち、他の三つと違う意味用法で用いられている「や」を一つ選び、記号で答えよ。